

N・J・ブラウン 著

『近代エジプトにおける  
農民の政治戦略  
——国家との闘争——』Nathan J. Brown, *Peasant Politics in  
Modern Egypt: The Struggle against the  
State*, ニューヘブン, Yale University Press,  
1990年, X+280ページ

加藤 博

## I

別の機会に言及したように(注1), 研究史を振り返って  
みるに, 従来, 欧米学界においてもエジプト学界におい  
ても, エジプト農民について, その国家に対する受動的  
な性格が強調され, 極端な場合には, ファラオの時代か  
ら20世紀の現代に至るまで, 基本的には変化のみられ  
ない存在として, つまりは歴史の変容を捨象されたスタ  
ティックな相のもとに描かれることが多かった。

欧米学界については, 「東洋社会」に自生的変革の契  
機をみようとし「オリエンタリズム」的偏見におい  
てはもちろんのこと, 第2次世界大戦後, 一方では発展  
途上国における民族主義運動の高まり, 他方では先進国  
における開発論ブームを背景に, 欧米のアカデミズムに  
おいて台頭した近代化論的「東洋社会」観にあっても,  
この傾向がみられた。この近代化論的エジプト農民観  
にあっては, 近代エジプト農民研究の先駆けとなったガ  
ブリエル・ペアー (Gabriel Baer) の論文の題名「(エ  
ジプト) 農民の服従と反抗」(注2) が示すように, 一見す  
るとエジプト農民の変革主体としての側面に焦点があて  
られているかに見える。しかし, その理論的枠組を検討し  
てみるならば, 農民の対国家行動が「服従」対「反抗」  
という二項対立的パターン分類のなかで機械的に捉えら  
れており, それが, 農民の行動を拘束する歴史的「場」  
を軽視した近代化論的歴史観, つまりは「伝統社会」を  
「近代社会」と対立させ, 近代における社会の変容を前  
者から後者への移行とみる単線的発展モデルに基づいた  
ものであることが分かる。

エジプト学界については, 19世紀末以降の民族主義運  
動の高まりとともに台頭し, 1952年のエジプト革命後の

50, 60年代にひとつのイデオロギーとして体系化された  
歴史観, すなわちエジプト近現代史を国民国家建設を目  
差すエジプト国民の運動と捉える民族主義史観の根強い  
影響力を指摘しなければならない(注3)。つまり, この歴  
史観の影響下において, 「農民」は, 民族主義運動の展  
開, とりわけ近代エジプト最初の民族主義運動であるオ  
ラービー革命以後, 国民統合の象徴として祭り上げら  
れ, 以後, 現在に至るまで, 政権の交代, 体制の変遷を  
越えて, エジプト「国民」の象徴, つまりは民族主義運  
動の主体であり続けている。しかし, こうした政治スロ  
ーガンのなかで頻りに言及される「農民」は, 社会構造,  
権力構造など現実の生活基盤を捨象され, ステレオタイ  
プ化された「農民」にすぎなかった。この事態は, 今日  
の民族主義史観からすると, エジプト国民国家の完成と  
位置づけられるべき1952年革命後においても, 変わりな  
い。いや, 逆に, 社会主義革命の敵「地主」との対比か  
ら, 「封建社会」における被搾取「階級」たる「農民」の  
悲惨な姿が強調されたところから, 事態は悪くなりさ  
えした。かくして, 「農民」は, 「権力」の変遷の過程で,  
その政治主体としての性格を, 服従する「忍従者」と反  
抗する「変革者」との間に動揺させたものの, 前述した  
近代化論的農民観と同様, 彼らの存在が歴史的「場」の  
なかで位置づけられることはまれであった。

もっとも, 近年に至って, このような研究事情を乗り  
越えようとする動向が, 欧米学界においてもエジプト学  
界においても現われてきた。

欧米学界については, エジプト農民反乱研究へのホ  
ブズボーム (E. J. Hobsbawm) の「原初的的反乱」論, ジ  
ームス・スコット (James Scott) の「モラル・エコノ  
ミー」論の適用が挙げられる。「原初的反抗」論は, その  
名称から誤解を受けやすいが, 「近代的反抗」つまり労  
働運動に代表される, 合目的で組織された政治運動へと  
至る以前の「前近代的反抗」形態をテーマとするのでは  
なく, こうした運動形態の外観上の差異を越えて, 「近  
代的反抗」であれ「前近代的反抗」であれ, いかなる社  
会経済状況下において被抑圧階層は「反抗」するのかと  
いうこと, 換言すれば, 直接に「反抗」の意味を問題に  
するのではなく, 特定の社会経済状況下における「反  
抗」の現われかたを問題とする。したがって, ここでは,  
「伝統社会」から「近代社会」への移行が所与として  
前提されているのではなく, 移行期そのものが問題と  
されている。

他方, 「モラル・エコノミー」論は, 「伝統社会」と  
「近代社会」の対立を前提するかに見えるが, この両者

は歴史の発展段階における前後の關係に置かれるものではなく、全く異質な、それぞれが独自の秩序維持システムをもつ、並存可能な「社会」と考えられている。こうして、「モラル・エコノミー」論は、「近代社会」と両立し得ないかにみえながら、現在に至るも強靱な生命力をもつ「伝統社会」に固有な文化、具体的には、「近代社会」における支配文化である「エリートの文化」に対する「民衆の文化」をもつばら研究対象とする。かくして、以上2つの理論は、近代化論にみられる「伝統社会」と「近代社会」との二項対立を、「原初的反抗」論については通時分析のなかで、「モラル・エコノミー」論については共時分析のなかで乗り越える意図をもつものと評価することができる。

また、エジプト学界については、従来のスタティックな「農民」像に挑戦し、それを打破すべく試みているアリー・バラカート(Ali Barakāt)の研究(注4)が注目されるべきである。つまり、彼は、同僚のエジプト人社会経済史家とともに民族主義義観を共有するものの、ほとんどの研究者が「農民」大衆を地主階級の前でなすすべもなく無気力な、さらには反動勢力の一翼を担いさえする群衆とみなすなかで、大土地所有制の形成に伴って顕在化してくる大地主層と一般農民層との間の階級闘争を強調する。つまり、彼は、これまでの制度史(とりわけ地主制度史)中心のエジプト農村、農民研究を、運動論的方向で新たに展開しようとし、そのなかで、従来、軽視されがちであった「農民」大衆の政治主体としての可能性を探ろうとしているのである。その方向は、欧米学界における「原初的反抗」論の方向に近いものであるが、アリー・バラカートは、この運動論的方向での農民行動の検討の試みの延長線上で、エジプト固有の農民文化にも思いを馳せようとしており、「モラル・エコノミー」論の方向とも通底し得るものである。

## II

さて、前置きが長くなったが、ここで紹介する表題の著作は、以上に略述した新しい研究動向のうち、エジプト農民研究に「モラル・エコノミー」論を適用する研究動向の代表作、というよりは、自覚的にこの理論を適用した最初の著作である(注5)。叙述は理路整然としたものであるが、さらに丁寧なことに、章題のほかに、それを一瞥するだけで本著作の内容が知られるような中みだし、小みだしがつけられている。そこで、まず最初に、

以下の解説の便宜のために章題と中みだしを翻訳してみよう。

### 第1章 「分裂する農民のイメージ」

農民の政治行動とは何か？

農民はいつ政治行動を起こすか？

なぜ農民は政治的に行動するのか？

### 第2章 「エジプト農村社会構造についての歴史的展望」

農業生産——変化の1世紀

変化の社会的諸帰結

商業的所領

商業的小規模土地保有

小規模生存土地保有システム

### 第3章 「エジプト農民観——無知な農民、不可解な農民」

上からの見解——エジプト農民の無知

下からの見解——農民の政治的外観の中身

政治的外観と政治的行動

### 第4章 「個別行動」

個別行動の伝統

沈黙の申し合わせ

個別行動の諸形態

### 第5章 「連帯行動」

連帯行動の性格

連帯行動の形態

構造、文化、そして連帯行動の形態

### 第6章 「法的・組織的行動」

農民と投票——公的抑圧の悪しき一様式？

農民、政党、そして政治組織

農民と陳情

### 第7章 「農民、反乱、そして革命」

オラービー反乱におけるエジプト農民

1919年革命におけるエジプト農民

結論——エジプト農民と革命

### 「結論」

国家に対する闘争

いつ農民は政治において活動的になるのか？

なぜ農民は政治において活動的になるのか？

合理的農民と倫理的農民

著者はまず第1章において、これまでの政治主体としての農民に関する学説を簡単に振り返るなかで、本著作の目的を、エジプトが政治・社会・経済的に大きな変容を被った1882年のオラービー反乱から1952年のエジプト革命までの期間のエジプト農民を題材とすることによつ

て、農民の政治行動に関するこれまでの研究に新たな知見を加えることである、と述べる。ここで政治行動とは、ハロルド・ラスウェル (Harold Laswell) に従って、「誰が何を、いつ、どのように獲得するか」という広範囲な争点 (issues) に意図的に係わる行動を意味する。そこで、この観点から当該期におけるエジプト農民の政治行動をみるに、それは(1)個別行動 (atomistic action)、(2)連帯行動 (communal action)、(3)法的・組織的行動 (legal and institutional action)、(4)反乱と革命 (revolt and revolution) の4つの基本的形態に分類できる。そして、この基本的形態の分類をもたらした要素は、第1に、開放的であるか閉鎖的であるかという村落の性格であり、第2に、農業生産システムの違いである。もっとも、農業生産システムは農民の生活の場である村落の社会関係に基づいて組織されるところから、この両者は密接に結びついている。

ところで、著者は、農業生産システムとそれに対応する社会関係の類型化作業に基づいて農民の政治行動を理解しようとする研究者を「構造主義者」(structuralist)と呼んでいるが、その彼らによれば、国家は農民に対して常に抑圧者として機能し、それゆえ、農民が政治行動をとれるのは国家権力が弱まった時、極端な表現を使えば、国家が農民にそれを「許した」時に限られる、ということになる。これはあまりに農民の政治主体としての契機を低く評価している。そこで、この「構造主義者」の農民観を修正する理論的枠組として著者が取り上げなのが、農民の政治行動に対する分析の焦点を「いつ」ではなく「なぜ」にずらす、スコットのモラル・エコノミー論である。すなわち、著者は、農民は経済合理性を越えたひとつの「文化」、つまりは「モラル・エコノミー」に基づく彼ら独自の政治的外観 (political outlook) をもつ、ということを主張するこの有名な理論の枠組のなかで、そしてそれを経済的合理性を基準に農民の政治行動を分析し得るとするサミュエル・ポップキン (Samuel Popkin) の「合理的農民」(rational peasant) 論と対照しつつ、「国家」と「農民」との関係は、「構造主義者」が主張するような一元的なものではなく、イデオロギー的、象徴的のみならず物質的、さらには構造的でもある、複雑で多面的なものであることを指摘するのである。

以上、著者は、農民の政治的主体としての契機を軽視する「構造主義者」に対して批判を加えているものの、農民の政治行動を農業生産システムとの関連のなかで理解しようとする彼らの視角を否定しているわけではない。逆に彼はそれに高い評価を与えている。しかし、現

実の生産システム、たとえば19世紀になって展開されたイズバと呼ばれる農場などをみるに、それは、「構造主義者」によって類型化された抽象的な生産システムの複数の混合物であり、彼らの理論をそのまま歴史研究に適用することはできない。かくして、著者は、近代エジプトにおける農業生産システムをその歴史的・社会経済的文脈のなかで論じ、そのなかから(1)商業的所領 (commercial estate)、(2)商業的小規模土地保有 (commercial smallholding)、(3)小規模生存土地保有システム (subsistence smallholding system) という3つの生産システムを抽出したのが第2章であり、さらに、近代エジプトにおける「国家」と「農民」との間の複雑な関係を具体的に検討し、そのなかから農民の「倫理的宇宙」(moral universe of the peasantry) の存在を指摘したのが第3章である。

そして、以上第2章、第3章における理論的枠組に準拠して、続く第4、5、6、7章において、順次、先に指摘したエジプト農民の政治行動における4つの基本的形態、(1)個別行動、(2)連帯行動、(3)法的・組織的行動、そして(4)反乱と革命にみられる諸特徴が分析されることになる。ただし、著者の主たる問題関心は、日常生活レベルにまで下った農民の政治行動であり、農民が村落を越えた組織、機関に働きかける行為、つまり著者いうところの法的・組織的行動や、オラービー反乱、1919年革命のような民族主義運動の一環として発生した革命的行動は直接の考察対象とされていない。そこで、分析の中心は第4、5章に置かれることになるが、著者はそこで結論が法的・組織的行動や革命的行動についてもおおむね妥当することを示すために、第6章において、投票、政党活動、役人への陳情など、どの法的・組織的行動を取りあげても、それが農民の主体的行動とはいえず、資金と手段をもつ農村部有力者あるいは都市居住者の影響下になされたこと、そして第7章において、革命的行動について、そこでの農民行動の高まりは、結局のところ、当時の政治環境が農民にそうすることを例外的に許したからなのであり、革命的行動と他の農民の政治行動との間に基本的な質の違いはないことを指摘している。なお、表(本書44ページ)は、耕作者の結びつき、村落共同体の性格、政治行動の形態、政治的争点を指標に、第4、5章における分析結果を上記3つの生産システムごとに整理したものである。

さて、以上のような問題設定、論証手続きをへて著者が到達した結論を示せば、以下ようになる。

近代エジプト農民の政治行動にみられる特徴は、彼ら

生産システム、村落タイプ、そして政治活動

生産システム	耕作者の結びつき	村落共同体の性格	政治活動の形態	政治的争点
商業的所領	定着労働者については強い  季節労働者については弱い	上(領主、地主)からの管理によって閉鎖的	定着労働者については、一般的にいて個別のながら、連帯行動をとる能力あり 季節労働者については、もし生じるとしても、それは常に個別的	地代(おそらく賃銀、雇用もまた)  賃銀、請負業者との関係
商業的小規模土地保有	強くも弱くもない	開放的	外部勢力によってまとめあげられない限り個別的	融資、販路、地代(それほど重要でないが賃銀、税)
小規模生存土地保有システム	強くも弱くもない、あるいは弱い	上(領主、地主)からの管理によって閉鎖的 下(住民)からの意識によって閉鎖的	個別的  連帯的	村落管理からの逃散ならびに地代、税 村落構造の維持と地代、税

の国家に対する抜きがたい不信、恨みであり、それを背景にした彼らと国家との恒常的敵対関係である。農民がなぜ国家をこれほどまでに嫌うかという、国家が農民に対して課税措置を講じるのみならず、農民を取り締まり、矯正し、調べあげ、再組織しようとするからである。そこには相互理解が欠けており、両者の対立は経済的であるとともに政治的なものである。つまり、農民は、おせっかいな国家に対して自治を守らんがために戦っているのである。

しかし、彼らの闘争の目標は制限されたものである。彼らは国家全体を破壊し、転覆し、打ち負かすことなど望んではおらず、彼らの闘争の対象は、通常、地方当局に集中している。つまり、農民は、地方当局を生活と共同体にとっての潜在的脅威とみなした時にのみ、彼らに抵抗したのであるが、逆に、そうみなし続ける限り、農民は彼らに対する抵抗をやめなかった。

そして、この近代エジプト農民の政治行動にみられる諸特徴は、全面的とはいえないものの、強力に「モラル・エコノミー」論の主張を支持するものとなっている。その根拠は以下の3つである。第1は、エジプト農民が、時として彼らを支配者や地方エリートとの対立へと導く、彼ら独自の政治的外観をもっていることである。第2は、エジプト農民が、彼らと地主、雇用者、金貸しとの関係を、経済的な結びつきというよりは、より広範な互酬的義務関係(reciprocal obligations)とみていることである。そして第3は、エジプト農民が国家の代理人を恐れ、恨み、避け、抵抗し、さらには反抗しき

えることである。こうした農民の態度は、「モラル・エコノミー」論の主張からすれば驚くべきことではない。というのも、この理論に従えば、国家は農民の生活にとって有害な暴力であるからである。

### III

以上、本書の内容の概略を紹介した。この著作が従来の研究、とりわけこれまで学界をリードしてきた、ペアーに代表される、近代化論的視座に立つ研究を乗り越え、近代エジプト農民研究に新しい地平を切り開いたことは明らかである。そしてまた、そこにみられる問題関心、問題設定は評者が常日頃抱いているそれと相通じる。そのため、本書に対して、とりたてて大きな疑問、批判はないのであるが、幾つか気になったことがあるので、それを以下、3点に整理して提示し、本書評の結びとしたい。

第1点は、エジプト農民像全般に係わる。評者は、かつて別の機会に、「原初的反抗」論と「モラル・エコノミー」論に言及した際、その有効性を認めながらも、労働者階級が未成熟であり、また農民もそれ独自の組織的な運動を展開することのなかったエジプトのような社会の農民研究にこの2つの理論を適用すると、いきおい、農民反抗の「原初的」性格が、また農民文化の「伝統的」性格が好んで取りあげられ、強調されることになるため、自覚的にその排除に努めない限り、従来のステレオタイプ化された「農民」像がもぐり込みがちになる危険

性があることを指摘した(注6)。評者は、本書を一読して、そこに一抹のこの種の危険性を感じた。もっとも、評者には、この危険性を避けるため、どの点をどのようにすべきかを理論的に指摘する能力はない。しかしただひとついえること、それは、本書にみられるような「伝統的」性格が強調された農民像に対しては、近代エジプト農民研究についてエジプト学界にみられる新しい動向、とりわけ前述した大地主層と一般農民層との間の階級闘争を強調するアリー・バラカートの農民像が対照されるべきである、ということである。

第2点は、国家と農民との関係に係わる。著者は、この両者の関係について、国家を農民に対するひとつの客観的な暴力と捉え、国家に対する農民の恐れ、恨みの感情、そしてその裏面である抵抗の姿勢を強調している。その一方で著者は、農民と地主、雇用人、金貸しとの問題について、それを経済的な結びつきを超えた互酬的義務関係とみなしている。評者は、国家を、たとえば地主などのような階級、階層のなかに解消してしまわず、少なくとも農民の意識において、ひとつの客観的な暴力と捉える著者の見解に同意する。と同時に、評者は、このような見解を前提したうえで、著者が農民と地主、雇用人、金貸しとの間に想定する関係、つまり互酬的義務関係を国家と農民との関係にも適用すべきではないかと考える。すなわち、国家と農民との関係は、従属、被従属の一義的關係として捉えられるべきではなく、両者の間には、統治の「正当性」観念、「公正、不正」の感情を介して、互酬的義務関係を指摘できるのではないか、ということである(注7)。

そして最後の第3点は、「連帯」(communal)の概念に係わる。農民の政治行動を大きく、「個別行動」と「連帯行動」に分類することに問題はない。問題は「個別」と対照された「連帯」という概念の内容である。というのも、著者は「連帯」の基本的枠組を村落(village)としているからである。ところが、評者が繰り返し主張しているように、「村長」という職種が設けられたのはせいぜい1840年代になってからであり、それまで村落社会の指導者はおおむね村長老と呼ばれ、彼らは村落内地区(hiṣṣa)(それはおおむね同族集団によって住まわれている)を基盤として選任され、それゆえある程度の規模をもつ村落には必ず複数の村長老がいたことが示すように、過去、さらには現在においてさえ、エジプト村

落に村落共同体の存在を安易に想定することは多くの誤解をまねくように思われる。つまり、評者には、エジプト農民の連帯意識をつくり出す枠組として同族集団がもっと注目されているのではないかと思われるのである。そして、そうすることによって、今はやりの言葉を使えばネットワークを介した、エジプト農民の村落を越えた社会関係を示すことができるかもしれない。

ともかく、以上の3点は深く関連し合っており、それを克服するためには、評者がこれまで何度も指摘しているように、歴史的変容を捨象されたスタティックなエジプト農民像をつくり出すイデオロギーの核心にある、「農民」を無媒介に「権力」つまり「国家」と対峙させることを避け、「農民」を社会構造、権力構造との関連から分析しなければならない。そして、その際、最も重要なテーマは、明らかに、「農民」と「村落有力者」との関係についての理論的・実証的研究であろう。

(注1) 拙稿「近代エジプト農民運動についての覚書」(長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所 1990年)。

(注2) Baer, Gabriel, "Submissiveness and Revolt of the Fellah," *Studies in the Social History of Modern Egypt*, シカゴ, University of Chicago Press, 1969年。

(注3) 民族主義史観に基づく基本的文献については、以下の文献解題を参照のこと。「東アラブにおける社会変容の諸側面」(研究会編『文献解題 東アラブ近現代史研究』アジア経済研究所 1989年) 4~10ページ。

(注4) Barakāt, 'Alī, "intifāḍat al-fallāḥin fi miṣr al-ḥadīth 1769—1952" [近代エジプトにおける農民反乱], 1987年(末刊行論文。長沢栄治氏と評者によるその翻訳がアジア経済研究所から近刊の予定)。

(注5) 一方、近代エジプト農民運動研究に「原初的反抗」論を適用した代表的業績は以下の著作である。Shulze, R., *Die Rebellion der Ägyptischen Fallahin 1919*, ボン, Baalbek Verlag, 1981年。

(注6) 前掲拙稿 271ページ。

(注7) この点については、以下の拙稿を参照のこと。拙稿「エジプト農民の権力観」(シリーズ<世界史への問い>第6巻『民衆文化』岩波書店 1990年)。(一橋大学経済学部教授)